

小原克博



現の自由」の名の下に、宗教的な価値を冒瀆することは許されないという主張である。

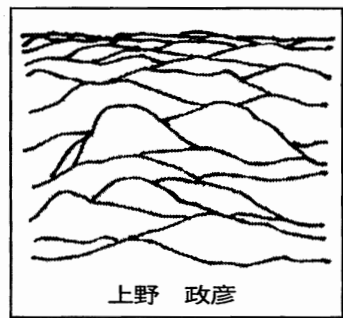
象徴という言葉聞いて、何を連想するだろうか。最近の話題の中から「ダ・ヴィンチ・コード」を思い浮かべる人も少なくないだろう。ハーバード大学の宗教象徴学者ロバート・ラングドンが、さまざまな事物に秘められた謎を、象徴解釈を手がかりに解いていくスリリングな物語展開に世界中の多くの人が魅了された。しかし同時に、この作品をめぐる世界各地で激しい論争や抗議運動が起こったこともわれわれは知っている。

二〇〇六年を迎えて早々、やはり世界中で、しかし「ダ・ヴィンチ・コード」より、はるかに過激な騒動を引き起こした「ムハンマドの風刺画問題」を、ここで思い起こさざるを得ない。キリスト教とイスラーム

象徴の解釈

今後の社会や世界のあり方を占うという宗教の違いがあるとはいへ、これら二つの騒動が連続したのは単なる偶然なのだろうか。フランスにおけるムスリム女子生徒のスカーフ着用の禁止や、西洋の世俗的（反宗教的）価値に対する異議申し立てという側面を持つテロ事件の頻発等を振り返ってみると、二〇〇六年前半に二つの類似した騒動が続いたの

は、偶然とは言えない、何か大きな時代の変化を象徴している気がする。



上野 政彦

ヨーロッパが生み出した啓蒙主義の精神に従えば、今日の「政教分離の原則」が端的に示すように、公の場における世俗的価値（「表現の自由」もその一つ）と私的な領域における宗教的価値はきちんと分離されるべきであって、両者の関係はある意味「決着済み」の事柄であった。

ところが、この関係が急速に流動化し、一連の異議申し立ての中で、両者の関係は再定義されることを求めているかのようでもある。日本近代史における「靖国問題」の変遷も、この流動化と無関係ではない。

象徴は多義的であり、また両義的である。それが「ダ・ヴィンチ・コード」に見られるように謎解きの深みを増すことにもなる。しかし同時に、そつであればこそ、ある者にとつて誇りや尊厳を象徴するものが、他者に対する侮辱とならないような工夫とマナーが必要である。残念ながら、曖昧模糊とした「宗教的情操（感性）の涵養」では、この時代の課題に因應することはできない。複雑な状況を読み解く、学問的な宗教知識教育こそが求められるゆえんである。

（同志社大教授・キリスト教思想）